

# ぼんぼん時計

## JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター  
四半期活動報告  
(2009年4月～6月)

### < 目次 >

#### 1. ドイツ連邦レベル等での学術・高等教育動向

- 1-1 大学協定Ⅱ 大学入学定員 27 万 5 千人増を計画
- 1-2 優れた大学教育事業に 108 大学が応募
- 1-3 授業料徴収反対訴訟は連邦行政裁判所で棄却
- 1-4 フンボルトプロフェッサーシップの授与
- 1-5 2007 年大学の支出は更に増加
- 1-6 フンボルト財団による大学ランキング
- 1-7 連邦と州は大学に 180 億ユーロの追加支出を確約

#### 2. ボン研究連絡センターの活動

- 2-1 玉井文部科学審議官来訪
- 2-2 ホンダヨーロッパ研究所訪問
- 2-3 NRW 州政府イノベーション・学術研究・科学技術省訪問
- 2-4 フンボルト財団主催フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者情報交換会出席
- 2-5 名古屋大学-ミュンスター大学 第 7 回日独共同大学院プログラムシンポジウム出席
- 2-6 DFG ザイボルト賞授賞式出席
- 2-7 第 14 回日独シンポジウム「ロボティクス」開催
- 2-8 ボン大学主催「日本・韓国デー」参加
- 2-9 在独日本大使館主催「日独交流 150 周年」第 1 回運営委員会出席
- 2-10 JSPS サマープログラムプレオリエンテーション開催
- 2-11 フンボルト財団年次総会出席
- 2-12 デュッセルドルフ大学主催「日本社会との交流会」参加

#### 3. 今後の予定

#### 4. センター長雑感

## 1. ドイツ連邦レベル等での学術・高等教育動向

### 1-1 大学協定Ⅱ 大学入学定員 27万5千人増を計画

dpa Nr. 16/ p. 2-3 2009年4月13日参照

連邦と州の大学協定Ⅱが成立した。長期間の議論の末、大学の入学定員をさらに十数万人分も増やすための計画が実行に移されることになる。キリスト教民主同盟及び社会民主党の率いる州の間で資金調達に関する合意が成立したが、それによると、2011年から2015年までの間に、大学の入学定員を合計で27万5400人分増加させる計画だと、4月6日ボンで共同学術協議会(Gemeinsame Wissenschaftskonferenz)が発表した。これにかかる資金は連邦と州が半分ずつ負担する予定。これによって大学協定Ⅱは、大学協定Ⅰによる大学の入学定員数をさらに三倍に増やすことになる。

合意案によると、新連邦州(旧東ドイツの州)は、人口が減少しても大学の収容定員を削減しなくてすむよう、援助が受けられることになった。独立州であるブレーメン市、ベルリン市、ハンブルク市も、州外からの学生が多いため、追加援助を受けられるという。社会民主党は、旧西ドイツの連邦州(都市を除く)は外国人学生が多いため優遇されるべきと要請したが、それは通らなかった。

ベルリンは医学部学生の数が他の都市に比べ極端に多いため、上記の追加援助に加え、さらに新連邦州に与えられる一時金も支給されることになっている。新連邦州は、出生率が低下しても、大学の収容定員を確保することを承諾したため、大学協定に投入される資金の10パーセント(州から5パーセント、連邦から5パーセント)が一時金として支給される。

2007年の大学協定Ⅰでは、連邦と州は2010年までに大学の入学定員を9万1000人分増加することを確約した。大学協定Ⅱにおいては、入学定員をさらにその三倍に増やすことになる。

(ボンセンター)

### 1-2 優れた大学教育事業に108大学が応募

dpa Nr. 16/ p. 19-20 2009年4月13日参照

「優れた大学教育事業(Wettbewerb exzellente Lehre)」HP参照

<http://www.exzellente-lehre.de/>

事業主催者であるドイツ学術財団連盟及び各州文部大臣会議(KMK)によると、1000万ユーロの資金が投入されたこの競争に、57の総合大学、47の専門大学から応募があった。全総合大学の60パーセント、全専門大学の40パーセントがよりよい大学教育のための革新的なコンセプトを競うことになる。

大学での先端研究助成のために連邦と州が実施したエクセレンス・イニシアティブでは総合大学だけが応募の対象だったが、この事業では専門大学も申請資格がある。

「大学教育における卓越した業績はもっと評価されるべきであり、よい大学教育に更なる名誉を」と連盟会長のアーレント・エトカー氏は要求しており、文部大臣会議議長のヘンリー・テッシュ氏も、「この競争が大学教育の分野における質の向上に幅広い刺激を与えることを期待し、またそれを望んでいる」と説明した。

総合大学選抜委員会と専門大学選抜委員会は5月初旬に第1次選考結果を発表し、総合大学13校と専門大学11校を決定。今後、各大学に詳細なコンセプト提出を求め、2009年末には少なくとも10大学のコンセプトが選定される予定。選定大学は最高で100万ユーロの賞金を獲得することになる。

事業概要については以下のとおり

1. 事業名「優れた大学教育事業 (Wettbeberb Exzellente Lehre)」
2. 主催者「各州文部大臣会議 (KMK: Kultusministerkonferenz Länder)」  
「ドイツ学術財団連盟 (Stifterverband für Deutsche Wissenschaft)」
3. 助成期間 3年
4. 支援規模 総額1000万ユーロ (各採択事業には100万ユーロを上限として支援)
5. 事業趣旨 大学教育の存在価値を高めること、そして学術拠点の将来にわたる発展のために大学教育の意味を強調することを目的。
6. 実施背景 (2008年3月6日 KMK 決議より) 教育と研究は、大学にとって等しく重要な中心的課題である。国際的な例が示すように、傑出した大学はその高評価を研究と並んで大部分を優れた教育に負っている。ドイツのいくつかの大学では、大学の利益は第一義的には研究によって形成されており、それらの大学は、二義的な意味で教育機関として大学を理解している。その結果、教育は日々の大学活動の中でもしばしば研究の陰に隠れてしまい、教員や若手研究者らにとっては、学術的評価やキャリアを決定的に推し進めるものとしての研究こそが重みを持つ。しかしながら、学生や若手研究者らにとっては、教員の真剣に取り組む模範的姿も極めて重要な意味を持ち、そこから大学教育の存在価値を緊急に高めることが必要とされる。
7. その他 異なる高等教育機関の形態を考慮し、総合大学や専門大学毎に独自の選考委員会が設けられた。  
この事業は今回のみの実施だが、評価によっては更に継続される予定。

(ボンセンター)

### 1-3 授業料徴収反対訴訟は連邦行政裁判所で棄却

dpa Nr. 19/ p. 8-11 2009年5月4日参照

ドイツの大学で一般授業料を徴収することは合法である。4月29日ライブチヒで連邦行政裁判所がこの決定を下した。これによって、先例的訴訟により授業料撤回をねらったパダボーン大学の学生の訴訟が却下された。ノルトライン・ヴェストファーレン(NRW)州の授業料に関する法律は、基本法にも国際的に重要な国際連合の連帯協定にも反しないと、ドイツの最高行政裁判官は判決を下した。

授業料は1 Semesterで最高500ユーロとなっており、2006年2007年の冬学期からキリスト教民主/社会同盟が政権を握っている旧西ドイツの州のうち、六つの州で徴収されている。

民事第6部の部長、フランツ・バルデンヘーヴァー氏は、授業料が多くの学生にかなりの金銭的負担をもたらすことは議論の余地がないと述べた。NRW州の立法者も、授業料により、所得の少ない、または、教育熱心でない社会層出身のアビトゥア試験合格者が、大学入学を断念せざるを得ないことを考慮していた。そのため、NRW州は所得の少ない学生には貸与型奨学金を支給することにより、授業料をまかなうことができるような措置をとっている。それゆえ、授業料は基本法で保証されている職業の自由、教育の自由の権利に反せず、奨学金から生じる利子もまだ容認できるものであるとの考えである。

訴訟を起こした学生は、ドイツが何十年も前に加入した国連の連帯協定に望みをかけていた。当協定では、大学に入れるかどうかは志願する学生の適性によってのみ決められるべきだと原告側の弁護士、ヴィルヘルム・アヘルポラー氏は公判で説明した。大学入学は適性とお金ではなく、適性のみで決定されるべきだと。連邦行政裁判所によると、国連の連帯協定の規定にはかなり解釈の余地があるという。

NRW州の学術担当省の発言によると、NRW州にある大学33校のうち、29校が学期毎に最高で500ユーロの授業料を徴収している。2008年に徴収した授業料は2億7千ユーロであった。授業料による収入は大学での修学と教育の質改善に使用される。NRW州の学術担当大臣、アンドレアス・ピンクヴァート氏は上記の判決の後、「州では経済的な理由から大学入学を断念しなければならないものはだれもない。というのは、第一に、学生は授業料をすぐ支払うか、または働き始めてから支払うか自由に決められる。また、ドイツ連邦奨学金を受ける学生の大多数は事実上授業料を全面免除されているようなものだ。」と説明した。

教育・学術労働組合(GEW)は連邦行政裁判所の決定を批判している。大学担当の労働組合幹部役員、アンドレアス・ケラー氏は「連帯協定で経済的、社会的、及び文化的権利を承認したのだから、ドイツは国際法上、無料で大学修学を提供することを義務づけられている。それを連邦

政府も州政府の議員も守らなければならない。」と述べ、連邦政府に基本法を変更し、大学での勉学における授業料無料化をドイツ全土で法的に確保できるような前提を作るよう要求した。

連邦議会の緑の党は、大学教育を受けた人が不足しているにもかかわらず、借金を恐れて大学入学を断念する大学入学資格保持者が今後も多数であると指摘し、連邦教育大臣アネッテ・シャーヴァン氏に、授業料の影響を定期的に、かつ批判的に調査するよう要請した。

### 連邦各州における授業料の比較

旧西ドイツの、キリスト教民主同盟が政権与党となっているほとんどの州では、授業料納付が必須だが、旧東ドイツの州ではそのようなことはない。しかし、チューリンゲン州とザクセン・アンハルト州では、長期履修学生は、他の旧西ドイツの州と同じく Semester 毎 500 ユーロの支払いが必要である。これには例外規定もあり、例えば重度の身体障害者には適用されない。

以下、参考として各州の授業料導入状況を挙げる。

ドイツ大学関係情報 HP (Studis-online) 参照

<http://www.studis-online.de/StudInfo/Gebuehren/>

獨協大学ドイツ留学 HP 参照

<http://www2.dokkyo.ac.jp/~doky0004/studium/deutsche-uni.htm>

州名	徴収有無	導入時期	授業料金額 (1 Semester あたり)	備考
バーデン・ヴュルテンベルク	○	2007 年夏学期	500€	
バイエルン	○	2007 年夏学期	500€	
ベルリン	×			
ブランデンブルク	×			
ブレーメン	○		500€	ただし、徴収は長期在籍者が対象
ハンブルク	○	2008/09 冬学期	375€	左記導入時期前は 500€
ヘッセン	×			2008/09 冬学期廃止 それ以前は 500€
メクレンブルク・フォアポメルン	×			
ニーダーザクセン	○	2006/07 冬学期	500€	ただし長期在籍者は 600～800€
ノルトライン・ヴェストファーレン	○	2006/07 冬学期	500€を上限	徴収と、その金額については各大学に裁量権あり
ラインラント・プファルツ	○		650€	ただし、長期在籍者が対象



ザールラント	○	2007/08 冬学期	500€	ただし、1,2 セメスターは 300 €
ザクセン・アンハルト	○		500€	ただし、長期在籍者が対象
ザクセン	○		30-450€	ただし、既に1つの課程を修了した学生が対象
シュレスヴィヒ・ホルシュタイン	×			
チューリンゲン	○		500€	ただし、長期在籍者が対象

※長期在籍者は5~7年(学部によって異なる)以上在籍する学生  
(ボンセンター)

#### 1-4 フンボルトプロフェッサーシップの授与

フンボルト財団プレスリリース 2009年5月7日参照

<http://www.humboldt-foundation.de/web/1080873.html>

5月7日ベルリンにおいて、連邦教育研究省(BMBF)のシャヴァーン大臣とフンボルト財団(AvH)のシュヴァルツ会長から、最初のフンボルトプロフェッサーシップが、受賞者となる8名に授与された。この賞は、ドイツの国際的研究賞において最高額となる500万ユーロの賞金がついており、BMBFの予算から援助され、フンボルト財団によって授与されるものである。また、この賞は、傑出した研究者に、ドイツの大学でフンボルトプロフェッサーとして長期間研究滞在することを可能にするものであり、その賞金は、ドイツでの最初の5年間における財政支援のためのものとされている。

シャヴァーン大臣のコメント；

「フンボルトプロフェッサーシップのもつ特別な強みは、一つの戦略的構想に焦点を当てていることにある。その構想とは、大学が研究者らのために長期的な見通しを保障しなければならないとするものである。その構想の有効性は実証されている。フンボルトプロフェッサーシップは、学問の地としてのドイツの魅力を目に見えて高めることだろう。この賞によって、世界トップレベルの研究者らが大学にやってきて、一つの研究の地が出来上がることになる。その地は教育についても大きな影響力を持つことになるだろう。我々は、国際的な視野でドイツを見たとき、ドイツという国は一つの才能を磨く地であり、ここには研究にとって良い風が吹いており、研究者らが自分自身を世界最高の研究者たちの中で比肩することに興味を惹かれる、そんなドイツを目指している。」

シュヴァルツ会長のコメント；

「8人のフンボルトプロフェッサーらがドイツの大学からの招へいに応じた。これは、ドイツのいくつかの大学は、世界トップレベルの研究者にとっても魅力的であり、適正な供給をもってすれば、厳しい国際的競争下においても勝利を手にする事ができるということである。フンボルトプロフェッサーシップは、そのために必要な環境をもたらす。私は、受賞した8名の研究者ら

が、まもなくドイツにおいて研究を開始することを大変喜んでいる。彼らは、世界最高水準の彼らの専門領域で協力することで、ドイツでの所属大学へ貢献をしてくれるだろう。」

この賞は、毎年10人までに与えられることとなっている。実験系研究者には500万ユーロ、理論系研究者には350万ユーロの賞金が渡され、主として研究チームの結成や研究室の設備のために使われる。それ以外にも、研究者らは国際的競争力のある給料をもらうこととなる。大学側には、研究者らが持続的にドイツでの研究を行うという観点を持ち続けられるよう、受賞者とそのチームを一つの構想の中に束ねるという課題が課せられる。

受賞者と受賞者のドイツでの所属大学は以下のとおり。

Oliver Brock 情報科学 ベルリン工科大学

Piet Wibertus Brouwer 理論個体物理学 ベルリン自由大学

Georgi Dvali 宇宙(天体)物理学 ルートヴィッヒ・マクシミリアン・ミュンヘン大学

Ulrike Gaul 分子生物学 ルートヴィッヒ・マクシミリアン・ミュンヘン大学

Tamas L. Horvath 神経科学 ケルン大学

Norbert Langer 宇宙(天体)物理学 ボン大学

Martin Bodo Plenio 量子光学 ウルム大学

Burkhard Rost 生物情報科学 ミュンヘン工科大学

(ボンセンター)

## 1-5 2007年大学の支出は更に増加

dpa Nr. 23/ p. 28-29 2009年6月1日参照

ドイツの大学の収入および支出は2007年更に増加した。連邦統計局の発表によると、収入は7.8%増の168億5千万ユーロ、支出は3.6%増の333億ユーロであった。

収入増の理由として、まず七つの州で授業料が導入されたことにより2007年学生費から得られた収入は6億ユーロから10億ユーロに上昇したと統計局は述べている。さらに、大学の枠外資金も顕著に増え。財団、産業及び政治関係からの助成金は、そのほとんどは研究に注がれるのだが、10.5%増の43億ユーロに上がった。

大学の支出の半分以上(192億ユーロ)は人件費である。経常経費は115億ユーロだった。27億ユーロは投資にまわされた。医学部、保健学部を設置していない大学の支出は134億で1.9パーセント増。医学部、保健学部を設置している大学は2007年教育、研究、病人の治療のため158億ユーロを支出し、前年比4.3%増となっている。単科大学では支出は前年比7.2%増の、34億ユーロだった。

(ボンセンター)

## 1-6 フンボルト財団による大学ランキング

フンボルト財団プレスリリース 2009年6月2日参照

<http://www.humboldt-foundation.de/web/1083580.html>

ミュンヘン工科大学が生命科学・自然科学分野で1位、ダルムシュタット工科大学が工学分野で1位、ベルリン自由大学が人文科学分野で1位を獲得。外国のトップレベル研究者らにとって、ドイツのどの大学が最も人気があるのか?このフンボルト大学ランキングは、フンボルト財団の援助によってドイツの研究施設で研究を行う奨学生や受賞者らの研究滞在を数えたものである。2004年から2008年の間に、フンボルト財団支援によるドイツでの長期研究滞在は合計で5128となった。

### ◆自然科学系分野

ミュンヘン工科大学 105

ミュンヘン大学 99

ハイデルベルク大学 86

### ◆哲学、法学、社会学系分野

ベルリン自由大学 125

フンボルト大学 120

ミュンヘン大学 109

### ◆生命科学

ミュンヘン大学 38

ミュンヘン工科大学 29

フライブルク大学 26

### ◆工学系分野

ダルムシュタット工科大学 37

アーヘン工科大学 29

シュトゥットガルト大学 29

それぞれの滞在の裏側には、ドイツにおける受け入れ研究者および協力研究者のための決断がある。また、一般的にドイツは諸外国のトップレベル研究者らにとってどれくらい魅力的なものであるのか、あるいは、ドイツの研究ではどの分野が国際的競争の場においてトップに位置づけられるくらい抜きこんでいるか、そして、ドイツのどの研究者が集中的に国際的な研究者間のコンタクトを取り続けているかといったことについての意見もそれらの滞在の裏にある。というのも、フンボルト財団の支援を受けた研究者らは、受け入れ研究者を自分自身で探し、その受け入れ研究者の学問的質の高さと国際的な認知とに基づいて決定するからである。そのことから、フンボルト大学ランキングにおける第1位の座は、国際的なコンタクトと評判にとって一つのより重要な指標となる。

(ボンセンター)

## 1-7 連邦と州は大学に180億ユーロの追加支出を確約

dpa Nr. 24/ p. 2-5 2009年6月8日参照

BMBF プレスリリース 2009年6月4日参照

<http://www.bmbf.de/press/2568.php>

連邦と州は財政難の折にも今後数年間にわたり、大学と研究に数十億ユーロを追加投資するつもりである。何ヶ月もの折衝の結果、連邦首相アンゲラ・メルケル氏と各州首相は6月4日、総額180億ユーロの予算をかけて三つの特別プログラムの継続を確約した。その資金の三分の二は連邦が受け持つことになる。

当該資金は、2011年以降の大学学生定員を27万5千人増、年間5%以内であれば研究費予算の増額を保障、先端研究及びエリート大学助成のためのエクセレンス・イニシアティブ継続に使用される。学術評議会とドイツ研究協会は安堵し、ドイツの学術にとって素晴らしい日だと語った。

首相は、この取り決めは、連邦と州が教育と研究の未来のために尽くしたいという意思を明確に表していると述べた。それとともに、この協定はドイツの学術水準を高めるために貢献すると。

メルケル氏は、2020年にすでに出生率が減少するため若者の人口が今より3百万人も減ることを指摘し、だからこそ、今後の世代の若者により教育を与えることはますます重要になってくると説いた。ベルリン市長クラウス・ヴォーヴェライト氏も素晴らしい進展だと述べた。国や州が教育と研究にもっと投資するという公言は具体的に実現される。

2011年から2018年の間に大学定員を27万5千万人分増やすのに64億ユーロ使われることになっているが、それは連邦と州が半分ずつ分担する。連邦はさらに15億ユーロを出資するが、それは大学研究の環境改善にのみ充てられる。エクセレンス・イニシアティブの継続には27億ユーロが用意されている。連邦はその75%を受け持つ。

ブランデンブルク州、ブレーメン市、メクレンブルク・フォアポンメルン州、ザクセン・アンハルト州、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州などの財政が厳しい州は、研究機関の年間予算の増額率を5パーセントまで保障するとした取り決めに対して批判的である。この保障は、再び歳入が顕著に増加した場合にのみ可能だと発言し、記録を取らせた。また、連邦財務大臣ペーター・シュタインブリュック氏もある議事録で財政が不安定であることを指摘している。2011年以降もプログラムを継続するなら、特に連邦の歳入が今後どうなっていくかを考慮しなければならない。それはシュタインブリュック氏が減税に対してはっきりと警告したものであると受け取られた。

### **未来への祝辞**

ドイツ政府はすでに景気刺激策、銀行救済、スクラップ補助金(廃車代替補助)、ディーゼル燃料の税率の引き下げのために数十億ユーロを投入している。それに加えて、大学と研究のための公的資金などどこから出るのか。この疑念と懐疑は協定調印の直前まで消えなかった。しかし、

連邦首相アンゲラ・メルケル氏と州首相は何ヶ月も続いた折衝の後、やっと 180 億ユーロの予算をかけた教育と学術の未来のための協定の締結を祝うことができた。それによって首相は 2008 年 10 月ドレスデンで開かれた教育サミットで約束した重要事項のうちの一つを初めて実行に移したことになる。

この承諾された資金が 2011 年から本当に全額連邦と州の予算から大学と研究に投入されるかどうかは今後の予算によるのでまだ答えられない。—そのような例は連邦と州の過去の特別プログラムでも過去いくつかあった。しかし、連邦とそれぞれの州でどの党が政権を握るにしても、承諾したことをそう簡単にまた覆すことはできない。

社会民主党の連邦会議議員団の団長、トーマス・オッパーマン氏は、大学と研究のための追加資金は不可避であるとしている。しかし、教育の将来のためにもっと投資をすると前もって公言し、同時に減税を約束しても、この二つを同時には守れないと述べた。これは連邦レベルでも州レベルでも同じである。社会民主党はとにかく、どうやって教育のための公的資金の不足分をまかなうかをはっきりさせるつもりであると。

しかしながら、キリスト教民主同盟と社会民社党の教育・研究政策担当者たちは協定が確定したことに対して安堵しており、特に、研究において 5%の年間予算の増額を保障できたことを強調した。この経済危機の時期において、インフラ率よりはるかに高いこのパーセンテージは未来に対する正しいシグナルだとしている。

### 180 億ユーロの助成プログラムを支える三本柱

#### 大学協定 II

出生率の高い年の大学入学資格試験受験者（アビトゥア受験者）のために 2015 年までに大学入学定員を 2005 年よりも 27 万 5 千人分増やすことになっている。その費用 64 億ユーロは連邦と州がそれぞれ半分ずつ負担する予定である。2007 年に締結された大学協定 I では 2010 年までに新入生定員を 9 万 1 千人分増加させる予定であったが、大学協定 II では定員を一人増加させるための費用を 2 万 2 千ユーロから 2 万 6 千ユーロに引き上げた。大学協定 II に再度加えられたのはドイツ研究協会のプロジェクトに支給される資金で、15 億ユーロの予算が研究のための材料や機器などの備品にあてられる。その費用は 2015 年までは連邦が単独で受け持つことになっている。

#### エクセレンス・イニシアティブ

2011 年まで継続されることになっているエクセレンス・イニシアティブには 27 億ユーロの予算が用意されている。連邦はその費用の 75 パーセントを、州は 25 パーセントを負担する。資金は選抜された大学に与えられる。このエクセレンス・イニシアティブは、まだ緑の党と社会民主党

の連立政権のときに総額 19 億ユーロの予算でもって始められた。目的はドイツの大学を国際的に認められるような先端研究の場にのし上げることである。さらにいろいろな助成重点分野を持つ三本柱のプログラムが計画されている。三番目の助成プログラム部門ではエリート大学になるための構想が選抜される。

### 研究と技術革新のための協定

この協定では、研究機関は 2015 年までは、年間予算の増額率が 5 パーセント以内であれば、その増額分も助成金がもらえることになっている。さらに、給与上昇分、燃料代の上昇分の資金も埋め合わせしてもらえる。いくつかの州では資金の給付が保証される予算の増額率を 3 パーセント以下にとどめたい意向である。マックスプランク研究所、ドイツ研究協会を含む 5 大研究機関の基本助成金は 2008 年約 57 億ユーロだった。

(ボンセンター)

## 2. ボン研究連絡センターの活動

### 2-1 玉井日出夫文部科学審議官来訪

月日：2009 年 4 月 1 日

場所：JSPS ボンセンター

4 月 1 日、文部科学省から玉井日出夫文部科学審議官と在独日本大使館から西井知則一等書記官がボンセンターを来訪し、センタースタッフと懇談した。まず、宮元副所長から JSPS ボン研究連絡センターの活動概要を紹介し、続いて小平所長からドイツと日本の学術交流の現状及び JSPS ドイツ同窓会との協力活動について説明を行った。



右中央 玉井文部科学審議官  
左中央 西井書記官

その後、小平所長、宮元副所長とともに早稲田大学ヨーロッパセンターを訪問し、Springmann 事務長から早稲田大学ヨーロッパセンターの概要とボン大学との協力関係等を説明いただいた。玉井文部科学審議官は、日本の大学が設置する海外拠点の運営や、ドイツとの留学生交流の現状や教育システムの問題点等を熱心に質問され、理解を深められていらっしやう。

(宮元)

### 2-2 ホンダヨーロッパ研究所訪問

月日：2009 年 4 月 7 日

場所：ホンダヨーロッパ研究所（ヘッセン州オッフエンバッハ市）

4月7日、第14回日独シンポジウム「ロボティクス」の講演者である、Prof. Dr. Edgar Koerner氏が所属するホンダヨーロッパ研究所（HRI-EU: Honda Research Institute Europe）を、小平所長、宮元副所長及び Albers 職員が訪問した。Koerner氏は当該研究所の所長であるとともに、ビーレフェルト大学認知科学・ロボティクス研究所の所長も兼任されている。最初に小平所長から講演の受諾に対する謝辞を述べ、続いて JSPS の活動概要と日独シンポジウムに関する説明を行った。その後、Koerner氏から研究所の概要を伺った。

当該研究所はホンダの研究子会社であり、人間の認識機構を生命科学・情報科学のみならず心理学・言語学のような多様な分野から解析・理解し、それをロボット開発に応用する研究を行っている。ヒューマノイドロボットとして有名な ASIMO の技術開発にも取り組んでおり、一部分ではあるが、研究室を見学させていただいた。また、研究開発のみならず、HRI European Graduate Network という枠組みで、大学や研究機関との共同博士課程、修士課程、ディプロマプログラムに参加しており、大学院生、若手研究者への教育にも取り組んでいる。学位取得を目指す学生やインターンを積極的に受入れ、人材育成も行っており、小平所長と企業側のポストドクや学生受入等にかかる問題点についても意見交換を行った。



中央 Koerner氏  
(宮元)

### 2-3 NRW 州イノベーション・学術研究・科学技術省訪問

月日：2009年4月27日

場所：州政府庁舎（NRW 州デュッセルドルフ市）

4月27日、小平所長、宮元副所長、濱田国際協力員及び横山国際協力員が、ボンを管轄するノルトライン・ヴェストファーレン（NRW）州イノベーション・学術研究・科学技術省（MIWFT）からの要請により、Dr. Michael Stückradt 事務次官及び Ms. Martina Munsel 国際課副課長を訪問した。

Stückradt 次官から、昨年の JSPSAbend への招待に対する謝辞をいただいた後、日本と NRW 州の大学間交流、今般の世界的景気後退に対する科学技術・研究開発の面からの経済対策について意見交換がなされた。その後、次官の個人的な考えとして、ボンを学術都市としてさらに発展させるため、日本の大学の欧州またはドイツ拠点をボンに設置してもらい、JSPS を中心とした日本の大学村のようなものをボンに集約したらどうか、との構想を伺った。また、2011年は日本と

ドイツの交流 150 周年にあたるため、MIWFT では州内の大学と日本の大学とでの学術的なイベント実施も検討しており、具体化した際の協力につき依頼があった。

次官との懇談に続き、Munsel 副課長と当センターで業務研修を行っている国際協力員への研修課題調査への協力について打合せを行った。Munsel 副課長は JSPS の活動に大変好意的であり、数年前から当センター国際協力員の研修調査もサポートしてくださっている。具体的には個々の研修課題から、調査訪問に適した州内の大学や担当者等を紹介していただくとともに、自らも当該調査に同行し、州政府としての補足説明や意見交換を行っている。当日は、濱田協力員、横山協力員からそれぞれの課題と調査計画の概要説明を行った。今後は、メールベースで意見交換を進めながら、夏以降に具体的な実地調査を行うことで協力していただける運びとなった。

(宮元)

#### 2-4 フンボルト財団主催 フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者情報交換会参加

月日：2009年4月28日

場所：ボン大学、ボン市旧市庁舎（NRW州ボン市）

本会は、フンボルト財団の奨学生らに対する派遣前オリエンテーションと帰国者による報告会を兼ねたものであり、同財団の奨学金援助を受けている奨学生ら約 160 名が参加した。開催に際して、会場となったボン大学学長 Jürgen Fohrmann 氏からの挨拶があり、同大学の Felix Otto 教授（数学）による基調講演などが行われた。その後、フンボルト財団奨学生らは、国籍ごとに 7 つのグループに分かれ、すでに国外での研究滞在を終えた奨学生とこれから派遣を控えている奨学生との意見交換の場（会場；ボン旧市庁舎）にうつった。傍聴したドイツ国籍のグループ（Group G）では、国外での病気、健康保険、銀行口座開設、ビザ申請および家族の同伴についてなど、生活全般についての議論が活発に交わされた。



開催式にのぞむ奨学生ら

(横山)

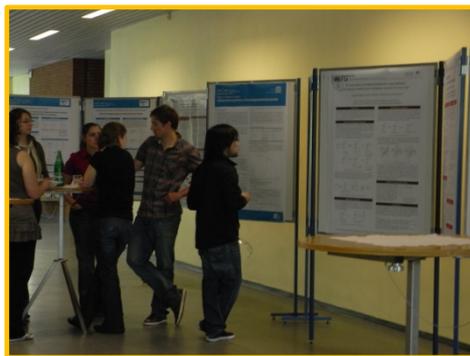
#### 2-5 名古屋大学-ミュンスター大学 第7回IRTG(日独共同大学院プログラム)シンポジウム出席

月日：2009年5月1日

場所：ミュンスター大学（NRW州ミュンスター市）

本シンポジウムは、大学院博士課程後期における教育研究を日独が協力するプログラム（JSPS：日独共同大学院プログラム、DFG：International Research Training Group（IRTG））の一環で行われているもので、ドイツのミュンスター大学化学薬学系大学院が名古屋大学大学院理学研究科物質理学専攻と物質科学国際研究センターと共同で開催し、今回で7回目となる。

ミュンスター大学側コーディネーターの Gerhard Erker 教授の挨拶に続き、宮元副所長が JSPS の紹介を兼ねた挨拶を行い、シンポジウムは始まった。Erker 氏は挨拶の中で、ドイツ側支援機関である DFG の事務所が東京に設置されたことに触れ、日本は科学を推進していく上で重要な国であると述べた。シンポジウムは終始学生主導で行われ、司会進行役をドイツ側の学生が交代で担当していた。聴講者は学生教授を含めおよそ 90 名前後、質疑応答も活発に行われていた。日独の数名の学生は 20 分間の発表をし、昼食を兼ねたポスターセッションはドイツの学生による各々の研究の発表の場となっていた。



ポスターセッション会場にて

(濱田)

## 2-6 DFG ザイボルト賞授賞式出席

月日：2009 年 5 月 6 日

場所：La Redoute（NRW 州ボン市）

2009 年度の Eugen und Ilse Seibold-Preise（以下、ザイボルト賞）を、慶応義塾大学法科大学院の井田良教授とハイデルベルク大学の Wolfgang Schamoni 教授が受賞し、5 月 6 日にボン市にて授与式が執り行われた。

授与式では、ドイツ研究協会（DFG）のクライナー会長（Prof. Dr. Matthias Kleiner）から、今後も日本とドイツの協調関係を推し進めて行きたい旨の挨拶があった後、ベルリン自由大学東アジア研究室日本学の Irmela Hijiya-Kirschner 教授から「西欧への長い道のりー日本における翻訳文化」と題して講演が行われた。その後、Rainer Wahl 氏、Regine Mathias 氏から祝辞が述べられ、両受賞者への賞の授与が行われた。

ザイボルト賞は、DFG から、優れた研究業績を有し、かつ、長年にわたって日独学術交流に貢献した研究者に授与されるものである。元ドイツ研究協会会長の Eugen Seibold 氏（在任期間 1980-1985）と Ilse 夫人からの寄付によって設立されたこの賞は、2 年ごとに授与が行われ、本年で第 7 回目となる。

(横山)

## 2-7 第14回日独シンポジウム「ロボティクス」開催

月日：2009年5月22日、23日

場所：カールスルーエ商工会議所（バーデン・ヴュルテンブルク州カールスルーエ市）

ボン研究連絡センターは、「ドイツ語圏日本学術振興会同窓会（German JSPS Club）」との共催により、毎年日独シンポジウムを開催している。同シンポジウムは、先端科学分野のテーマを取り上げ、日独双方から第一線の研究者が研究の現状と将来展望等の知見を紹介することにより、相互の理解を深め、研究協力の促進をはかることを目的とするものである。第14回目となる本年は、フランスとの国境に近いドイツ南部カールスルーエ市で開催された。

本年のテーマは「ロボティクス」であるが、当該テーマは2006年度当センター主催コロキウムでも取り上げられている（ぼんぼん時計第14・15号参照）。コロキウムが、主に若手研究者による研究発表及び討論を行う専門的な研究会という位置付けに対し、今回のシンポジウムでは、技術的な見地からだけでなく、産業や人間とのかかわり、貢献、影響等も含めた幅広い視点から講演が行われた。



講演に先立ち、同窓会長のProf. Dr. Heinrich Menkhaus氏司会のもと、在独日本大使館公使の三好真理氏、連邦教育研究省国際局のDr. Hans-Jörg Stähle氏、フンボルト財団副事務局長のDr. Gisela Janetzke氏から開催の祝辞が述べられ、その後、JSPSを代表して井上博允監事から開催及び日頃の協力に対して謝辞が述べられた。井上監事は2006年のコロキウム「ロボティクス」においても

研究者として日本側オーガナイザーを務めていただいている。当シンポジウムにおいてもJSPS代表としての挨拶に引き続き、ご自身の研究および我が国のロボット研究の歴史を総括的に紹介され、その後の講演への理解を助ける1面も担っていただいた。講演者は以下のとおり。（各講演者のCVおよびAbstractsはボンセンターHPを参照ください。

<http://www.jpsp-bonn.de/index.php?id=78>)

シンポジウム1日目

○Prof. Dr. Rüdiger Dillmann氏

カールスルーエ工科大学

「From Sensimotor Primitives Learned from Humans to Imitation and Manipulation Strategies in Humanoid Robots」



○Prof. Dr. Masayuki Inaba氏

東京大学

「*The Nature of the Household and Outdoor Robot Assistants – the Future Musculo Skeletal Design of Robot Kotaro*」



○ Prof. Dr. Ortwin Renn氏

シュトゥットガルト大学

「*Technical Assistance from Intelligent Robots in Health Care and Household Service: Prospects and Limitation from the Perspective of the Users*」



○ Prof. Dr. Edgar Körner氏

ホンダヨーロッパ研究所

「*Elements of Brain-like Intelligence for ASIMO- Learning Visually Guided Autonomous Interaction*」



シンポジウム2日目

○Prof. Dr. Hiroshi Ishiguro氏

大阪大学

「*Android Robotics – Understanding Humans by Building Robots –*」 ※ビデオ上映及び自動プレゼンテーションによる講演



○Prof. Dr. Sven Behnke氏

ボン大学

「*Humanoid Soccer – A challenge for AI and robotics*」



○Dr. Susumu Shimizu氏

トヨタモーターヨーロッパ

「*Toyota Partner Robots: Current Status & Future Direction*」

※トヨタ自動車 パートナーロボット部理事 Dr. Soya Takagi氏の代理講演



○ Prof. Dr. Michael Beetz氏

ミュンヘン工科大学

「*Cognition, Control and Learning for Everyday Manipulation Tasks in Human Environments*」



シンポジウムには同窓会の正会員をはじめ、JSPS事業経験者や地元カールスルーエ工科大学で関連分野を研究する学生など合計約180名の参加者を数えた。欧米では「人間は神が作ったもの」というキリスト教の考え方があるため、ヒューマノイドロボットは社会に受け入れ難いという感覚が一般的だと思われているが、参加者の多くが日本への理解が深い方々であるためか、今回のシンポジウムのテーマや、日本の研究開発を好意的に受け止めていたようである。とはいえ、参加者の研究分野は様々であり、「聖書では人間がベストの存在とされているのに、なぜ人型ロボットを作る必要があるのか?」という問いも会場から起こり、講演者が回答に詰まる場面も見受けられた。

シンポジウムの最後には、小平所長から結びの言葉として、「人間活動の活発化にともなう産業の発展が現在のヒューマノイドロボット開発につながり、将来の人間社会が更にその協力を求めることになるだろうが、ロボット研究者が抱えるロボティクスの夢が叶うのか叶わないのか、これもまた哲学的な問題である。」と締めくくった。



なお、シンポジウム開催時期が日本での新型インフルエンザ感染拡大期と重なり、トヨタ自動車の高木理事および大阪大学の石黒教授の来独が不可能となったのは大変残念なことである。しかしながら、それぞれ代理講演者の派遣と自動プレゼンテーション発表で対応していただき、シンポジウムは恙無く終えることができた。講演していただいた先生方には勿論のこと、急な要望にも迅速にご協力いただいたトヨタの高木理事、清水氏、そして大阪大学の石黒教授にはこの場を借りて感謝申し上げます。

(宮元)

## 2-8 ボン大学主催「日本・韓国デー」参加

月日：2009年5月27日

場所：ボン大学（NRW州ボン市）

ボン大学アジア研究科日本・韓国学研究専攻主催の「日本、韓国デー」が、5月27日、ボン大学にて開催された。今回が初の試みとなるこの催しは、日本、韓国との学术交流支援事業の紹介、留学生の体験談報告、同国間の学術的交流に携わる幅広い分野の人々の講演などによって構成されており、当日は大勢の参加者を迎え盛況な催しとなった。また、JSPS ボンセンターは、午前中の学术交流支援事業紹介の部において、宮元副所長から JSPS 事業概要の紹介を行った。

学术交流という様々な取り組みの中での、両国における異文化間の差異について多くの観点が紹介され、熱心に聞き入る人やまた別の意見を主張する人などが出て活発な雰囲気であった。また、自然科学系分野での研究協力の場では、付随的なテーマとなりがちな異文化間コミュニケーションが主題として前面に出ており、文系研究科主導の催しとしての面白みを持つ取り組みとなっていたように感じた。

プログラム「日本、韓国デー」

### 第一部

◆導入：ボン大学アジア研究科日本・韓国学研究専攻 Zöllner 教授

◆学术交流支援事業紹介：JSPS ボン事務所副センター長宮元氏

DFG 東アジア・モンゴル担当課長 Kruessman 氏

AvH アジア地域担当課長 Manderla 氏

DAAD アジア・オセアニア担当課長 Toyka-Fuong 氏

◆体験談：「日本、韓国における異文化コミュニケーション」元 DAAD 東京職員 Anne Gellert 氏

◆パネルディスカッション：「日本、韓国の学術機関との協力」

◆講演：「これまでとこれから 外目から見た日本研究」ケルン日本文化会館長 上田浩二氏

### 第二部

## ◆日本、韓国への留学

## 第三部

## ◆日本、韓国の文化的・政治的観点

日本、韓国映画上映

## ◆韓国「春、夏、秋、冬、そして春」(2003年 Kim Ki-duk 監督)

## ◆日本「森の学校」(2002年西垣吉春)



JSPS 事業紹介



会場のボン大学

(横山)

**2-9 在独日本大使館主催「日独交流 150 周年」第 1 回運営委員会出席**

月日：2009年5月29日

場所：在独日本大使館（ベルリン市）

5月29日、小平所長と宮元副所長が在独日本大使館主催「日独交流 150 周年」第 1 回運営委員会に出席した。2011 年は日本と当時のプロイセンとの修好通商条約の調印から 150 周年にあたり、5月5日にベルリンで行われた日独首脳会談にて交流 150 周年を盛り上げることが合意されている。日独の更なる交流・相互理解を深めるための企画・構想を協議すべく、大使館のイニシアティブにより在独日本関係公的機関の代表者が集まったものである。

会議では、ドイツ側の要望も踏まえながら、取り上げるにふさわしいキーワードやテーマ等が話し合われ、一つのテーマをもとに、各機関がそれぞれの事業趣旨に合致したイベントを行い、イベントとしての相乗効果を高めることで合意した。今後は今秋に予定される第 2 回運営委員会に向け、各機関が大使館と連絡調整を行いながらイベント企画を検討していくこととなった。

(宮元)

**2-10 JSPS サマープログラムプレオリエンテーション開催**

月日：2009年6月5日

場所：グスタフ・シュトレッセマン会議場（NRW州ボン市）

ボン研究連絡センターでは、JSPS サマープログラムに採用された渡日間近の若手研究者に対し、日本での研究を有意義に開始してもらうとともに、親睦を深めてもらうことを目的としたオリエンテーションを毎年ボンで開催している。本年度は採用者14名のうち11名が参加した。

当日は小平所長の挨拶で始まり、ドイツ側推薦機関であるDAADからDr. Ursula Toyka-Fuongが日独交流事業の説明、各参加者による自己紹介、宮元副所長からJSPSの紹介、本部人物交流課の山中係員からサマープログラム概要説明等が続いた。休憩をはさみ、元フェロー Mr. Andreas Gierlich、Ms. Miriam Ungerによるプログラム参加体験談、質疑応答、JSPSドイツ同窓会役員 Prof. Dr. Ingrid Fritschから同窓会の紹介があり、最後に参加者を囲んでの夕食会となった。

元フェローによる体験談では、偶然にも両人がお勧めの旅行地として日本三景の一つである“宮島”を挙げたことや、研究室やホストファミリーに用意すべきお土産の話などが、若い参加者の異文化に対する興味を引いていた。質疑応答では、受入機関の研究環境、言葉・文化・生活習慣、各種事務手続き、そして日本でのオリエンテーション会場となる総合研究大学院大学での状況等、幅広い事項が話題となった。前総研大学長である小平所長が出席されたこと、また、今年度初めてJSPS本部の担当者が参加したこともあり、詳細な点まで回答や情報提供がなされ、全ての参加者から有意義であったとの感想が聞かれた。



小平所長による挨拶



山中氏による事業紹介

(濱田、宮元)

## 2-11 フンボルト財団年次総会出席

月日：2009年6月8日、9日

場所：ベルリン自由大学、大統領公邸、ドイツ連邦議員会館等（ベルリン市）

6月8日、9日、フンボルト財団（AvH）の年次総会がベルリンで開催され、当センターから小平所長が出席した。総会には在独中の60余ヶ国からの外国人研究者600人（配偶者、子供含む）が80の都市から招かれて集まった。総会の概要は以下のとおり。

6月8日

1. フルート、ヴィオラ、ダブルバスの三重奏曲演奏
2. Schwarz 教授 (AvH 会長)、Lenzen 教授 (ベルリン自由大学長) の挨拶  
Schwarz 会長は、アレキサンダー・フンボルトが往時、アメリカ合衆国のジェファークソン大統領に招かれた際に「奴隷制度は非人間的で廃止すべきだ」と主張した史実を引いて、「学問のイノベーション・力」とも言える要素に言及、多くの発展途上国からの研究者を勇気づけた。
3. Parzinger 教授 (プロシア文化財保護財団会長) の記念講演 (中央アジア埋蔵文化財関連)
4. 同窓会イニシアティブ提案表彰 (AvH 同窓会員からアイデアを募集し審査・授賞の形で支援をする新たな企画: 今回は「西アフリカ・ネットワーク構築」、「ナンビア情報化促進構想」、「中央アジア分野横断型連携構想」の3件)
5. フンボルト同窓会員の研究発表: Y. Li (2008年度中国)、S. Leopoite (2009年度UK)
6. 音楽演奏 (1と同じ演奏者)
7. ホール・ホワイエでの大レセプション

6月9日

1. 再選されたばかりの Koehler ドイツ大統領夫妻の招きで大統領公邸 (Schloss Belvue) の庭に家族も含めた全参加者が集まり、親しく言葉を交わす機会が与えられた。大統領は在独中のフンボルトフェローを前に、「この困難な時代にあって皆さんはドイツの誇りであり、世界の宝です。」と挨拶された。
2. これに先立ち、公邸内で第5回の Seibolt 賞 (Scherl 大統領時に日独交流に貢献した学者に対し贈るドイツ国の賞として始められた) が大統領夫妻から関西学院大学の OD 小川 曉夫教授 (独語学) に手渡された。AvH 会長ほか、日本側からは在独日本大使館神余大使と小平、田中先生 (前 JSPS ボンセンター長) らが陪席した。
3. 昼からは、Spree 川遊覧船上での昼食会等のエクスカージョン
4. 夜はドイツ議員会館 Kaisersaal で夕食会、研究賞授与

(小平)

## 2-12 デュッセルドルフ大学主催「日本コミュニティとの交流会」出席

月日: 2009年6月16日

場所: デュッセルドルフ大学 (NRW 州デュッセルドルフ市)

6月16日、デュッセルドルフ大学で「日本コミュニティとの交流会」が開催され、当センターから小平所長の代理として宮元副所長が出席した。これは、昨年11月に学長に就任した Prof. Dr.



H. Michael Piper 氏が日本との関係を重視しており、大学と日本人社会とのよりよい協力関係を築くためにデュッセルドルフ総領事や当地における日本企業等の代表者が招待されたものである。

当日は、主要施設を視察するキャンパスツアーの後、大学のゲストハウスであるミッケルン城にて、Piper 学長による挨拶や日本側企業等の代表者による挨拶、現代日本研究科の前みち子教授による研究科の紹介等が行われた。また、ディスカッションでは日系企業とデュッセルドルフ大学との連携・協力を強化するための方法が話し合われ、企業側からは留学希望の社員を受け入れてくれる大学講座への寄付により協力を高める可能性はあるが、大学や設置講座にその魅力があるかどうかの問題となろう、といった意見や、ドイツ式ビジネスを教えるビジネススクール等の設置などの意見が出された。

その後の懇親会で Piper 学長と意見交換する機会を得て、JSPS の活動紹介や過去のデュッセルドルフ大学との協力関係を説明したところ、機会を作るのでぜひプログラム紹介を行って欲しいとの言葉をいただき、早速検討することとなった。

(宮元)

## **2-13 来訪&訪問、会議出席等**

### **【4月】**

- 04月01日(水) 濱田国際協力員、横山国際協力員赴任
- 04月01日(水) 文部科学省玉井文部科学審議官、在独日本大使館西井一等書記官来訪
- 04月06日(月) 在独日本大使館福井一等書記官来訪
- 04月07日(火) 早稲田大学留学生津田氏、当センターにてインターン開始(～7月)
- 04月07日(火) 小平所長、宮元副所長及び Albers 職員がホンダヨーロッパ研究所訪問(於オッフエンバッハ)
- 04月13日(月) 小平所長が JSPS 海外研究連絡センター長会議出席および DFG 東京事務所開所式出席のため一時帰国(～23日)
- 04月27日(月) 小平所長、宮元副所長、濱田国際協力員、横山国際協力員がノルトラインヴェストファーレン(NRW)州イノベーション・学術研究・科学技術省を訪問(於デュッセルドルフ)
- 04月28日(火) 宮元副所長、Albers職員、濱田国際協力員、横山国際協力員がフンボルト財団主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者情報交換会出席(於ボン)

### **【5月】**

- 05月01日(金) 宮元副所長、濱田国際協力員、横山国際協力員がミュンスター大学-名古屋



- 大学日独共同大学院プログラムシンポジウム出席 (於ミュンスター)
- 05月06日(水) センタースタッフが DFG ザイボルト賞授賞式出席 (於ボン)
- 05月07日(木) ベルリン自由大学 Prof. Dr. Irmeka Hijiya-Kirschnereit 氏が JSPS プログラムの情報収集のため来訪
- 05月22日(金) 第14回日独シンポジウム開催(～23日) (於カールスルーエ)
- 05月27日(水) センタースタッフがボン大学主催「日本・韓国デー」に参加(於ボン)
- 05月28日(木) 小平所長、宮元副所長がドイツ学術財団連盟年次総会出席(於ミュンヘン)
- 05月28日(木) 小平所長、宮元副所長がマックスプランク研究協会本部(MPG)及びマックスプランク物理研究所(MPI Physics)を表敬訪問(於ミュンヘン)
- 05月29日(金) 小平所長、宮元副所長が在独日本大使館主催「日独交流150周年」第1回運営委員会に出席(於ベルリン)

### 【6月】

- 06月02日(火) 宮元副所長がデュッセルドルフ総領事館主催新型インフルエンザ対応説明会に参加(於デュッセルドルフ)
- 06月05日(金) JSPS サマープログラムプレオリエンテーション開催(於ボン)
- 06月08日(月) 小平所長がフンボルト財団年次総会出席(～9日)(於ベルリン)
- 06月16日(火) 宮元副所長がデュッセルドルフ大学主催 日本コミュニティとの交流会出席(於デュッセルドルフ)
- 06月26日(金) ボン大学博士課程学生 Mr. Pulskota 氏が外国人特別研究員事業の申請情報収集のため来訪
- 06月27日(土) 小平所長、宮元副所長及び横山国際協力員が JSPS、JSPS 仏同窓会及び独同窓会共催フォーラム(2010年5月開催予定)準備会合に出席(於ストラスブール)
- 06月30日(火) 小平所長、宮元副所長及び濱田国際協力員が第6回日独コロキウム打合せのためブランデンブルク工科大学訪問(於コットブス)

## 2-14 その他の活動

- ・ ドイツ語版ニューズレター(ルンド・シュライベン)等の作成・配布
- ・ 各種照会、情報収集・調査、情報提供業務
- ・ 訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ JSPS Abend(2009年9月開催)準備
- ・ 日本の大学等紹介及び JSPS 国際事業プロモーションイベント(2009年10月開催)準備
- ・ 第6回日独コロキウム(2010年2月開催)準備

### 3. 今後の予定

#### 2009年

- 07月01日(水) 宮元副所長、濱田国際協力員がベルリン工科大学で2009年JSPSプロモーションイベント実施の打合せ(於ベルリン)
- 07月01日(水) 宮元副所長、濱田国際協力員がDFG年次総会出席(於ライプツィヒ)
- 07月02日(木) 小平所長が調査研究のため一時帰国(～10日)
- 07月24日(金) 小平所長が調査研究のためマックスプランク電波天文学研究所訪問(於ボン)
- 08月13日(木) 宮元副所長、Albers職員、横山国際協力員がフンボルト財団主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者情報交換出席(於ボン)
- 09月02日(水) JSPS Abend(ボンセンター年次報告会)開催(於ボン)
- 09月09日(水) ケルン日本文化会館、NRW州イノベーション・学術研究・科学技術省、ドルトムント工科大学、JSPS共催シンポジウム「高齢化社会における生活の質」開催(於ケルン)
- 09月29日(火) ドイツ語圏日本研究者会議参加(～10月2日)(於ハレ)
- 10月16日(金) 日本の大学及び渡日プログラム紹介イベント開催(於ベルリン)
- 10月16日(金) JSPSドイツ同窓会主催「会員による会員の招待」イベント参加(～17日)(於ベルリン)
- 10月21日(水) 小平所長がダルムシュタット工科大学-早稲田大学IRTG(日独共同大学院)シンポジウムに出席(於ダルムシュタット)
- 11月09日(月) 小平所長が日独科学技術合同委員会出席(～10日)(於ボン or ベルリン)
- 11月11日(水) 本部研究事業部職員による研究費・研究環境等調査(～17日)

#### 2010年

- 02月17日(水) 第6回日独コロキウム開催(於コットブス)(～20日)
- 未定 小平所長が第2回JSPS-DFG共催ラウンドテーブルに出席(於日本)

### 4. センター長雑感

フンボルト財団の年次総会に招かれて陪席した。ベルリン開催時の目玉行事の一つに、ドイツ大統領の公邸庭園での大統領挨拶がある。今年は再選なったばかりの、大学教授でもあるケーラー大統領が、家族も含めて600人にも及ぶ招へい研究者に言葉をかけられた。「皆さんはドイツの誇りであり、世界の宝です」と。続いてフンボルト財団会長のシュヴァルツ教授は、かつてアレキサンダー・フンボルトが北米に招かれた際に、ジェファーソン大統領に「私の学問に照



らし、奴隷制度は人道に悖るので、廃止しなさい」と言ったとされている史実を引いて、イノベーションにとって学問が重要であることを語った。アフリカ・アジアの若手研究者たちは、大統領や会長と話そうと、先を競って押し寄せた。庭園内の一角には、この会のための幼児コーナーも設けられていた。学問とは何か、人を育てるとはどういうことか、考えさせられた。着任して1年が過ぎようとしているが、良き職員達に助けられて、未だ学習中の身である。

(小平)

**ぼんぼん時計第24号**  
**日本学術振興会ボン研究連絡センター**  
JSPS Bonn Office  
Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)  
Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)  
Phone +49 (0) 228-375050 Fax +49 (0) 228-957777  
[www.jsps-bonn.de](http://www.jsps-bonn.de)